P4-4

なぜ湖沼は人々の心を惹きつけるのかー湖沼と信仰に関する考察

沼澤 篤 [1,2]

[1] 一般社団法人霞ヶ浦市民協会、[2] 霞ヶ浦水質調査研究会

キーワード：湖沼再生に何が不足か、科学への過信を反省、水への素朴な信仰心の大切さ、総合的考察の重要性

抄録

湖沼の再生にとり、科学技術、流域管理、財政、政策、法令などのハード的方法論は重要であるが、一向に環境が改善しない湖沼が多い現実を見ると、それだけではなく、湖沼に対する人々の素朴な信仰心をとりもどすソフト面の対応も、車の両輪のように重要ではないか。理性によって湖沼を研究すると同時に、感性、すなわち湖沼を愛する心を涵養することが目標になるべきではないか。本論で様々な事例を紹介し、人と湖沼の関係性を心理面から重視し、湖沼観を総合的に再形成していく上での示唆を含めて、霞ヶ浦流域の地域社会における信仰について、世界の事例と比較しながら考察する。

1. はじめに

古来、静寂な湖沼を眺める人は人生の苦悩を癒され、安息の時を過ごし、人智を超えた神秘性を感じ、水の神や精霊を崇拝した。湖沼は信仰の対象であった。しかし近代合理精神によって世界の神秘性が否定され、科学が発達した。人間が湖沼を利用し、排水を河川、湖沼、海洋に捨てた。湖水は汚染され、その恵み（生態系サービス）は再生産されない。近現代の湖沼学では、湖沼は冷徹な科学的研究の対象でしかない。人と湖沼の関係の研究は科学によって本格化したが、人の心は癒されず、湖水の清澄さを取り戻すことは難しい。かつてニーチェは「神を冒涜した後、人間は自身をも冒涜する」と指摘した。一方、パスカルは、「あらゆる物体の総和も、あらゆる精神の総和も、またそれらのすべての業績も、愛の最も小さい動作にもおよばない。これは無限に高い秩序に属するものである」と示唆した。我々はパスカル的精神を尊重し、古代人の心に学び、素朴な信仰心を大事にしつつ、心理学、宗教学、哲学、民俗学などのソフト面に光を当て、湖沼学、陸水学、水処理技術、流域管理、政策などのハード的方法論を補完することで、湖沼をより大切にできるのではないか。水質、生物多様性、生態系サービスをふくめて、湖沼環境を改善できるのでないか。第 6 回世界湖沼会議で、「湖の音に耳を傾けよう」と霞ヶ浦宣言に謳われた。本論では、その先進性を継承し、湖沼と人の関係性について考察を深め、今後の湖沼環境改善へ向け、これまでの世界湖沼会議では殆どなかった視点を取り上げてみたい。

2、本論

世界中の民族は、古代から湖沼神、河川神、海神、水神、水の精霊や化身を、人智を超えた存在として信仰し、感謝しつつ畏れてきた。中国や日本では、龍、蛇、亀、河童、河伯が水神やその化身として信仰された。ヒンドゥー教ではサラスバティー神が水神であり、弁才天信仰の起源となった。ヨーロッパではヒドラやアケーロスが水神として、ポセイドンが海神として位置づけられた。絶対神を信ずるイスラム教世界においても、清浄水は貴重とされ、オアシスの緑色は国旗に使用されるシンボルカラーである。このように水を神聖とする信仰は、宗教的に洗練されたものを含めて、古代人の素朴な心に自然発生したのではないか。

弥生時代以来、稲作に精励してきた日本人は、水の神を山の神、田の神と同一視する例が多い。田植えは神と人の協働作業だった。春、山の雪解け水は落葉の成分やミネラルを含みながら流下し、山麓の水田を潤し、湖沼や沿岸海域に豊かな水産物をもたらす。山の神が水の神となって麓に降り、田神となり、稲を育て、労働を見守り、豊かな稔りをもたらす。秋、田の神、水の神は山に昇り、厳しい冬、山の神として、麓の民を慈愛深く見つめ、山、森を守る。実は山の神は農民の祖霊であり、子孫の農の営みを見守るとされた。山形県庄内平野の農民は山岳仏教に深く帰依し、雪解け水として出羽三山から祖霊が里に降りてくると信じ、春の農作業を開始した[1]。

かつて霞ヶ浦湖畔に暮らす人々は水神宮に参拝し、恵みに感謝し、時に水害をもたらす湖水を畏敬してきた

〔2,3〕。現在、汚濁した湖水は堤防に囲まれ、高齢の漁師以外は湖水の恩恵を実感することなく、関心が薄い。筑波山周辺には、水源が信仰の対象となる石碑が多い。筑波山麓の森林に涵養された桜川は流域の水田に農業用水を供給し、豊かな稔りをもたらし、集落の生活を支えた。中世には官衙に穀物倉庫が建てられ、南北朝期から戦国期には小田氏が桜川流域に、当時としては規模が大きい城を築くほど、生産力が豊かであった。山麓の桜川市（旧真壁町）山尾に水分（みくまり）神の石碑がある〔4〕。桜川の田土部堰の傍らにも水神碑がある。この堰は桜川中下流域の広い水田を潤す取水堰である。石岡市（旧八郷町）小幡では筑波山から流れだす恋瀬川支流が杉葉線香を造る水車を動かし、麓の水田を潤す。小幡にも水分神の石碑がある。

現代では湖水は巨大機場によって大量取水され、筑波山を貫くパイプラインで遠隔の農地へ送水され、水田、畑地を潤す。揚水機がなかった明治以前、周辺の水田は霞ヶ浦から水を引くことが出来ず、河川や溜池から供給を受けた。霞ヶ浦流域は年間平均降水量約 1200mm（全国平均約 1800mm）の少雨地域である。霞ヶ浦・北浦流域の笠間市（旧岩間町）愛宕山、石岡市龍神山、桜川市（旧大和村）雨引山楽法寺では雨乞い祈祷がかつて行われた。この気象条件下、霞ヶ浦周辺（特に行方地域）の谷津には溜池が約 50 箇所も築かれ、古くは常陸国風土記に谷津の水源をめぐる伝承が記録されている。かすみがうら市加茂、阿見町実穀の溜池、土浦市田村の湖畔に弁天宮がある。弁才天は仏教の守護神として日本に伝わり、各地で水の神、芸能や商売の神として素朴な信仰を集めた。霞ヶ浦の各河岸（霞ヶ浦四十八津、北浦四十四津）の水神宮は集落の人々に守られてきた。水神講を続けている集落もある。水神の祠に供える小餅は、かぴたり餅と呼ばれ、冬季に飢える河童に捧げるものであった。河童は水神の化身であり、夏に水遊びする子供達や農耕馬を水に引き込む悪戯をしないように願い、人々は河童に餅を施した〔4,5〕。

現代、流域の住民は湖水を揚水した水田で生産された米を主食にする。工業団地で大量に湖水を使い、製品を生産し、排水し、給与を得て家族を養う。湖水を原水とする水道水を飲用に、調理水や洗濯水に使う。生活排水は霞ヶ浦に戻る。我々はワカサギやシラウオを食べ、湖水の恵みを受け、世代交代してきた。我々は水道水を水洗トイレに使う。排泄物が湖水に戻り、物質が循環している。湖水によって、地域社会が維持され、歴史が刻まれてきた。まさに霞ヶ浦は我々自身である。しかし、そのことを感謝の念とともに常に意識している住民は多くない。

「湖沼は人間を映す鏡」（琵琶湖宣言）とすれば、現代人は、それを曇らせ、打ち割ることで自分自身と心をも破壊しかねない。流域の人間社会の矛盾を凝縮して投影するのが湖沼ではないのか。水源林の里山、平地林を破壊し、住宅団地、工場団地、ゴルフ場を造成した。住宅や工場は排水を流し、湖沼へ負荷を与える。肥料と農薬を使い、生産性を上げようとするが、窒素、リン、化学物質は湖沼に流れ込む。治水・利水目的で湖岸を人工化し、高い堤防で囲み、自然浄化力を奪った。霞ヶ浦という鏡は、堤防の枠に嵌められ、濁り、人間達の顔を映すことなく、事態はますます深刻になりつつある。

世界の湖沼等では神聖な場所が水辺にある例が少なくない。過去の世界湖沼会議で訪れたイタリアのマジョーレ湖畔の古い教会に昔の修道士のミイラが安置されていた。インドのジャイナ河畔のタージマハルは荘厳な霊廟だった。インドネシア・バリ島のブラタン湖畔のウルン・ダヌ・ブラタン寺院は水の神を祀るがゆえに湖水の清浄さが保たれていた。琉球や奄美では美しい海の彼方に祖霊の世界、ニライカナイがあるとされ、素朴な信仰を捧げる。琵琶湖では静寂な湖水を浄土とみなす信仰が息づき、日本遺産に登録される根拠となった。竹生島、沖島、浮御堂、比叡山延暦寺、石山寺などを巡る人気コースが設定され、多くの観光客が訪れ、湖を守る信仰心が地域を活性化させている好例となっている。この視点でも琵琶湖は霞ヶ浦のお手本である。

神道では礼拝前に水垢離を取る。鳥居の傍の手水場で手と口を漱ぐ。水で浄めた神聖な社を死者（先祖）と生者（子孫）の厳かな対話の場と位置づけていると解されるのではないか。仏教の般若心経では「是諸法空相、不生不滅、不垢不浄、不増不減」と唱え、浄と穢は本来区別出来ないと教えている。それに関し、霞ヶ浦周辺で栽培される蓮と蓮田の泥の関係性を考察してみよう。ヒンドゥー教と仏教では、泥から美しい花を咲かせることから、蓮花は聖俗の象徴である。泥は有機物の分解産物であり、死の姿であるが、そこから生が再生される。インドでは、

干上がった池や洪水後の泥は病を癒すとして、泥の中に身を投じ、泥を全身に塗る素朴な人々がいる。泥は湖沼生態系において、生産と分解の物質循環の中で重要な位置にある。流入河川が運搬した栄養塩類がプランクトンを増殖させ、魚類の餌料となる。生物の遺骸は湖底に沈み、あるいは波浪によって岸辺に打ち上げられ、分解され、泥となる。泥は穢れではなく、輪廻転生の姿と解される。古代インドにおいては、宗教者が長い時間をかけて自然を観察した末に、湿地や泥が意味する本質を直感的に洞察したのであろう。岸辺の泥から再生する美しい蓮花が信仰の対象となったことは当然かもしれない。一般現代人も、蓮が仏教やヒンドゥー教の象徴的な花であることに違和感がないことをみれば、湖沼や岸辺の湿地を尊重する素朴な感性に辛うじて繋がるのではないか。

湖沼の浄化を目指すとき、科学技術を捨てることはできない。霞ヶ浦宣言には「科学の英知に深い注意を払おう」とある。しかし、湖沼全体を保全するには、自然科学的認識のみでは不十分であることに、湖沼の環境保全をめざす人々は気づくべきであろう。科学と同時に、「湖沼は我々自身」という心の問題を念頭に置くことは、今後目指すべき方向性の一つではないか。湖沼問題に関わる市民が科学的理解によって課題を明確にし、思いを共有する人々と連帯・協働しながら進むことは重要だが、芸術や文化等を含めて、哲学、心理学、宗教、民俗学的な認識を深め、多様な分野に関わりながら、認識の高みをめざす努力が重要であろう。残念ながら、研究者や行政のみならず、素朴な住民が構成する地域社会において、それが不足していることは否めない。湖沼を大切にする心を価値観の上位に置くことが人々の常識になることを期待したい。

文学作品にも湖沼がメタファーになる例がある。レムの名作「ソラリス」では、惑星ソラリスの海は、探査目的で地球から派遣された研究者の記憶を可視化し、再現する。ある研究者は亡くなったはずの妻と再会したが、彼女は彼を苦しめる。ソラリスの海とは何か。人間の心を投影する神の啓示か。人類は地球上の清い流れを疎かにしながら、遥かな惑星ソラリスの海と対峙した。ソラリスの海を研究する意味はあるのか。科学とは何か。「ソラリス」はそれらを隠喩的に問う作品として解釈される[6,7]。難解な作品として知られる「ソラリス」のモチーフを、湖沼と人の関係性に投射してみると腑に落ちることが多い。湖水を汚濁させ、水産物を収奪し、農業用水、工業用水、都市用水として水資源を濫費しながら、その汚濁機序を解明し、改善方策を探るべく人間は研究する。その矛盾した姿勢に湖沼を崇敬する謙虚さを窺うことはできるのかという、根源的な疑問がこの文学作品で呈示されているのではないだろうか。

3、まとめ

石牟礼道子は「苦海浄土」で、豊穣の内海であった不知火海の恵みを否定した文明の罪を告発した[8]。ニーチェが予言したように、海の神を冒涜した人間は自身をも冒涜したのであった。素朴な人は夕暮時、茜色の空を映す鏡のような湖面を眺めて特別の思いを抱く。まさに湖沼はソラリスの海のように人生の記憶を覚醒させる。

湖沼は単に大きな貯水池ではないし、汚し、開発し、経済活動に利用し尽くす対象でもない。我々は湖沼を様々な視点から深く洞察し、謙虚な湖沼観を復活させなければならない。第 17 回世界湖沼会議の主題「人と湖沼の共生」は永遠の課題なのか。かつて古代人が美しい湖沼に惹かれ、静穏な湖面を素朴な心で眺めた時に感じたアガペー（神仏の人間に対する愛：感謝と幸福感に通じる）を現代人が取り戻すことができるのだろうか。

過去の世界湖沼会議では、日本で開催された例以外、市民参加が少ない。それは科学、技術、効率、管理、財政等を優先させる姿勢に一般市民が違和感を抱くからではないか。この会議に専門家だけでなく、素朴な心を持ち続ける人々が参加しなければ湖沼の再生は不可能だろう。「湖は私自身である」という心の声を聴き、科学の成果を尊重しつつ、理性と感性の融合をめざし、総合的で全人格的湖沼観を形成できれば、湖沼再生への希望が見えてくるのかもしれない。

参考文献

[1]森敦「月山」河出書房新社 1974

[2]坂本清「霞ヶ浦　目で見るふるさと」崙書房 1976

[3]佐賀純一「霞ヶ浦風土記」常陽新聞社 1995

[4]奥井登美子「アオコに挑んだ地球市民」北斗出版 1992

[5]住井すゑ「牛久沼のほとり」暮らしの手帖社 1983

[6]レム「ソラリス」、沼野充義訳、国書刊行会 2004

[7]沼野充義、NHK テキスト「100 分 de 名著　ソラリス」NHK 出版 2017

[8]石牟礼道子「苦海浄土　わが水俣病」講談社文庫 1969